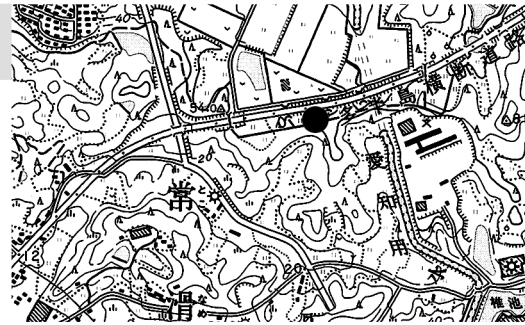


しいけ こよう
四池 A 古窯

所在地 常滑市金山字四池地内
調査理由 知多半島横断道路拡張
調査期間 平成 13 年 5 月～平成 13 年 6 月
調査面積 600 m²
担当者 赤塚次郎・武井繁樹・皆見秀久



調査地点 (1/2.5 万「常滑」)

調査の経過 調査は、知多半島横断道路拡張工事に伴う事前調査であり、愛知県建設部道路建設課から愛知県教育委員会を通じた委託事業として、平成 13 年 5 月から平成 13 年 6 月にかけて実施した。調査面積は、600 m²である。

立地と環境 知多半島の中央を南北に低丘陵が背骨のように貫き、そこから東西に小規模な尾根が数多く延びている。それらの尾根に知多古窯跡群と呼ばれる数千にも及ぶ古窯が存在している。四池 A 古窯は常滑市金山字四池に所在する。前述の半島中央部低丘陵から西に延びる尾根の北側斜面に立地し、標高約 45 m を測る。調査区の北側を知多半島横断道路が東西に走り、南側は急激に落ち込み谷地形となっている。また調査区のすぐ西には、1992 年に常滑市教育委員会によって調査された四池 B 古窯が存在する。

調査の概要 調査は、樹木の伐採の後、表土剥ぎを行い、その後人力で掘削を行った。その結果、周辺の道路建設や農地整備のため、窯体南側煙り出し部分は削平され既に消失していた。また、数箇所に盗掘の跡も確認された。天井部も落下しており焚口や焼成室の明確な区別は確認できなかった。窯体の規模は現存した床面で南北約 8 m、最大幅約 3 m、傾斜角度は 19 度を測る。なお分焰柱は確認されなかった。また、灰層確認のため窯体北側に南北 3 本、東西 1 本の土層観察用のベルトを残し、最大で約 4 m 掘り下げたが、調査区内において灰層は確認されなかった。

調査の結果、窯体 1 基と溝 3 条、階段状遺構と性格不明の土塁が検出された。遺物は大型の甕が主体で壺、鉢、碗も極少量出土した。また、羽釜、陶錘、陶丸が各 1 点出土した。出土量はコンテナ 35 箱で、遺物から 13 世紀前半の古窯であると推察される。

(武井繁樹)



SY01 断ち割り (北より)



SD01 (南西より)